

# 旧ユーゴスラビアの旅 2018

旅のチカラ研究所

2018年12月

旅のチカラ研究所 植木圭二

アドリア海を挟んでイタリア半島の対岸になるクロアチアなど旧ユーゴスラビアの5カ国に行ってきた。どの国も自然の美と昔のヨーロッパの面影を色濃く残すと共に、残念ながら近年の内戦の傷跡も残している。この地域をめぐるパッケージツアーに妻と2人で参加した。

## 序章 新しい試み

今回訪問した5カ国は訪問順ではセルビア、ボスニアヘルツェゴビナ、クロアチア、モンテネグロ、スロベニアであるが、これら旧ユーゴスラビアの国々は民族や宗教が複雑に入り組んでおり紛争が絶えない。歴史的にもヨーロッパとアジア・中東を結ぶ出入口のような地域なので強国が所有をめぐり争いが絶えない。そのためにヨーロッパの火薬庫とも呼ばれていた。



通常の旅行記では、1日目は〇〇、2日目は△△などと訪問順で書く。そのように訪問した順番で旅をトレースすることにより、あたかも一緒に旅したような気持ちになるという効果があり、それが極めて一般的だ。

ところが今回訪問した旧ユーゴスラビアの各地は色々な意味で複雑に入り組んでいるので、訪問順番どおりにトレースすると繁栄した時代やスポットライトを浴びた時期が行ったり来たりして混乱する。それはこの地域を理解するのが難しくなり、理解できないと結果として旅そのものが楽しくならない。

なので、今回は新しい試みで訪問の順番にこだわらずに時代の流れで追っていきたい。

それを日本国内の旅行に例えると、成田空港に着いた外国人観光客が東京、鎌倉、京都、広島を訪問する場合、東京を観光してから西に向かい鎌倉、京都、広島という順番で行くのが当たり前であるが、日本の歴史から考えるとそのような順番はあまり好ましくない。

まず平安時代の京都、次は平安末期で平清盛が作った広島の厳島神社、そして源頼朝の鎌倉、その後は室町・戦国時代にまた京都、次は江戸つまり東京、第二次世界大戦末期には広島原爆、そして現代を代表する場所としては東京それも秋葉原辺りになるだろう。このような順番で訪問できれば日本の歴史は理解し易い。多分、その方が旅も楽しくなるに違いない。

新たな試みによって旧ユーゴスラビアの地域を理解し、そして楽しむ一助になればと思う。

## 第一章 石灰岩の大地

### ■人類以前のカルスト台地

カルスト台地という言葉がある。日本では山口県の秋吉台などの土地をそう呼んでいる。このカルストという言葉の語源は、スロベニア語の岩でゴツゴツしたという意味だという。

カルスト台地とは石灰岩でできた大地が雨水や川、地下水によって侵食されてできた地形の総称で、地上に出ているもの以外に地下空間のものも含めており地下の場合は鍾乳洞と呼ばれる。当然のように、このようなカルスト台地は人類文明が生まれる遙か以前から生成され続けている。

私たちを乗せたバスはだだっ広い平原をひた走る。彼方に白いものを頂く山々があり、青空と山肌の白が絶妙なコントラストになっている。裾野の方はカルスト台地が広がっているが、上方の白いものは雪のようにも見える。しかしここはアドリア海沿岸でそんなに高い山もなく、雪が降るはずもなく石灰岩だろう。確認する術もないが、そのうちにどちらでも良くなってくる。

それはこの地方の山の雄姿が気に入り、シャッターを押したいということだけでよいのだろう。



## ■プリトヴィツェ国立公園

クロアチアのプリトヴィツェ国立公園も石灰岩によって独特の地形やエメラルドグリーン  
の湖を作り出している。クロアチアの観光パンフレットにはこの写真が多く使われており、とて  
も有名な場所だ。もちろん世界遺産になっている。

その世界遺産登録は1979年と古い。何しろ世界遺産登録の第一号は1978年なので、その翌年  
というのだから相当なものだ。それ程このプリトヴィツェが世界的に早くから注目されていた  
ということだ。

1979年は何と私が大学を卒業して会社に入った年でもある。当然、当時の私は世界遺産など  
という言葉も知らなかったし、それは日本人のほとんどがそうだったろう。何故ならば日本の世界  
遺産登録は1993年と遅く、法隆寺、姫路城、屋久島、白神山地の4カ所が同時登録された。

琵琶湖の半分ぐらいもある国立公園内には大小合わせて16の湖と92の滝がある。標高640m  
から500mまでの高低差を水平方向に8kmにも渡って湖群とそれを繋ぐ川や滝でできている。

自然が豊富な公園内には1146種の植物が確認され、そのうち70種は特有种になる。野生の動  
物が生息し、クマ、狼、カワウソをはじめ300種近い蝶や鳥がいるという。

この一帯は1億3500万年～6600万年前に造られたものだという。もちろん人間が作ったので  
はなく地球が造ったものだ。

## ■感動の湖水散策

国立公園なので管理は行き届いておりハイキングコースも整備されている。時間があれば1日  
かけて歩いて湖巡りをしたいのだが、今回は2時間で回ることになる。下の地図上で示したAか  
らBまで歩き、BからCへは船で湖を渡り、CからAまで公園のバスで戻るというコースだ。



全体のスケールからすれば、ほんのわずかな部分の散策だが、十分に楽しむことができそうだ。

それはガイドの話では夏のオンシーズンは大変混雑していて遊歩道は行列が続くが、今はオフシーズンなので公園内はすいていて貸し切り状態、自然を満喫するにはラッキーだという。

標高も高く朝も早いので吐く息は白い。温度計は氷点下を示しており道は凍っている。歩き始めると最初に目に入ってくるのは一番下にある湖とそれに落ちる滝で、その落差は 100m もありそうな見事な光景だ。すいているのが幸いしてか、同じツアーの客たちは皆一斉に写真撮影に走っている。これが夏の混んでいる時期ならば撮影待ちに結構な時間がかかるに違いない。

滝は冬なので水量が少ないのがやや残念だ。

もう一つ残念なことに湖のほとりを歩く遊歩道が凍結のために通行止めになっている。管理が行き届いているということはこういうことだろう。毎朝係員が巡回して安全を確認しており、本日は一部が凍結しているのでその部分の遊歩道を封鎖したという。安全最優先は致し方ない。何しろ、この気温で水に落ちると命の危険がある。

私たちが歩いている遊歩道の下は絶壁でその下が湖面だ。そして所々にある展望台からは見事な景観を見ることができる。上から見る湖の色はエメラルドグリーンで、陽が当たるとその濃さが更に増す。冬なので水量や太陽光の角度などでパンフレットにあるような濃いエメラルドグリーンにはなっていないが、それでも素晴らしい。

この入浴剤を入れたような見事な輝きは湖底の石灰岩の作用というが、石灰岩の力はたいしたものだ。いや、これは地球が造った芸術品で、地球こそがたいしたものなのだ。

眼下には通行止めになった遊歩道を見ることができる。



湖底もそうだが岩壁も石灰岩で出来ている。あまりに白いので最初は雪かと思っていたが、まぎれなく石灰岩の岩肌である。これが本家本元のカルスト台地なのだ。

少し雪が残る木道を歩いてこの公園で一番大きな湖にある船着き場にたどり着く。ここから船に乗って湖の長手方向の対岸を目指す。船は100人くらい乗れそうな真っ平な大きなボートで、電気駆動なので何の音もたてずに静かにゆっくりと走り出す。

途中、湖に落ちる大小様々な滝や小島を見ながらの航行は、心が洗われるような気持ちにさせてくれる。ピンと張りつめた寒い朝の空気と、透明度の高い冷たい湖の静寂の湖面を私たちの乗ったボートだけがゆっくりと動いている。大自然に同化しながら時間だけが過ぎていく。



日本にも青森に十二湖という沼の集まった景勝地がある。その十二湖も青や緑と色こそは似ているが、滝はない。他にも草津温泉近くのチャツボミゴケ公園という緑色のコケが広がる池と滝の公園があるが、まるでミニチュアだ。躍動感とスケールにおいて全く桁違いだ。

ガイドが言うには中国の九寨溝も似ているという。これも凄いスケールだというが残念ながら私は行ったことがない。しかしプリトヴィツェの方が大きく、そして綺麗だと付け加えていた。

#### ■地球が造った芸術作品

スロベニアにも地球が造った石灰岩の芸術作品がある。ポストイナ鍾乳洞だ。

この鍾乳洞の誕生は調べても諸説あって決め手がない。鍾乳石の大きさと成長速度からすると10万年以上は確かで、200万年くらい前から前から生成が始まったようだ。

今から46億年前に地球が誕生した。気の遠くなるような昔のことなので、ピンとこない。もう少し理解できる良い方法がある。

46億年の歩みを1年間に凝縮して考える。1月1日の午前0時に地球が誕生して、現在が12月31日の24時だと仮定するととても分かり易い。

そう定義すると人類最古のエジプト文明は今から約5000年前で、地球が生まれて1年に例えればわずか34秒前のことになる。つまり12月31日23時59分26秒頃からエジプト文明が始まり、あのギザの大ピラミッドはその3秒後の23時59分29秒に完成した。

されば、この鍾乳洞とて最近の話になる。10万年前は約11分前、200万年前は約4時間前の出来事になる。いずれにしても12月31日の夜、紅白歌合戦とゆく年くる年の時間だ。

ちなみにプリトヴィツェ国立公園は1億3500万年～6600万年前ということなので、同じ方法で10日前～5日前になる。つまり12月21日～26日という年末だ。

## ■ヨーロッパ最大の鍾乳洞

スロベニアの南西部にあるポストイナ鍾乳洞はヨーロッパ最大、世界でも屈指のレベルのものだ。全長は27kmでその1/5が公開されている。

見学のための施設が昔から完備されており、地底探検にはトロッコ電車が使われている。この敷設が1872年というから相当に古い。その歴史と景色の素晴らしさからかトロッコ電車の乗り場には世界の政治家、王族・貴族、著名人が見学した時の写真も展示されている。

2人掛けのトロッコ電車は遊園地の乗り物のような感じだが100人は乗れる本格的なものだ。

自転車くらいの速度で走りだすと、いきなり鍾乳洞のすごい光景が目の前に広がる。その空間はかなり広く、照明も上手く配置しており実に素晴らしい。まさしくここは異次元だ。

5分程走るとシャンデリアが天井から吊るしてある広い大きなホールのようなところに出る。もちろん自然の鍾乳洞の中だが、何とここは本当に舞踏会が開かれていた場所だという。

さらに5分程乗っているとトロッコ電車終点にたどり着く。時速10km~15kmくらいの速さで10分間程走ったので、多分入口から2kmくらいのところだろう。

ここからは徒歩見学になる。約1時間の洞窟探検は決して飽きない。

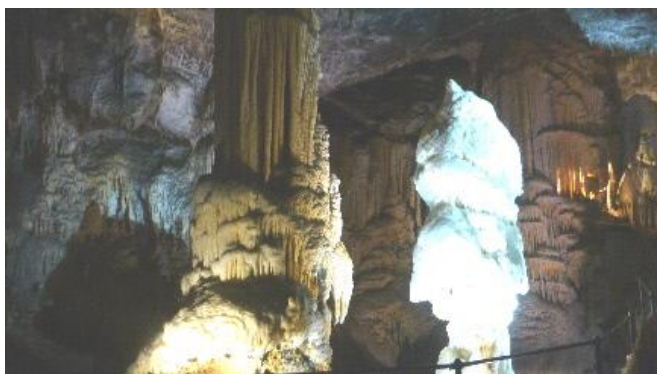
次から次へと未知なる空間が現れ、見事なまでの自然の造形美に驚くばかりである。天井まで30mくらいはあるだろうか幅も奥行きも50mくらいの大きな空間の中に山があり、大小様々な鍾乳石が下からも上からも延びている。もはやこの世の光景ではない。



後ろを歩く韓国人のおじさんが大きな声で「オオッー！」と感嘆のため息のようなものを発している。いや、ため息を通り越して吠えている。それが洞窟の壁に響いて更に異様な雰囲気演出してくれる。驚き、感激する気持ちは充分に理解できる。声は小さいが私も同様に吠えている。それは綺麗で神秘的というのもあるが、何よりも圧倒的なスケールからだろう。

「地底大冒険」、「謎の惑星探検」などというタイトルの映画の撮影に十分に使用できる大きな空間を次々に抜けていく。

私は日本の有名な鍾乳洞にも当然のように足を運んでいるが、全くもってスケールが違う。島国の日本と大陸との違いを見せつけられた感がある。スケールが桁違いだと実感する。



鍾乳石は石灰岩を含んだ地下水が天井から垂れ下がり成長する。また重いものは下に落ちて積み重なり成長する。含有成分によってそれが異なり、色合いも違ってくる。

ここポストイナ鍾乳洞は規模も大きいがブリリアントと呼ばれる見事な白い鍾乳石が特徴でもある。

さらにそのすぐ隣に茶色の鍾乳石が並んでいるから凄い。全く成分が異なる石灰岩がすぐ近くに存在するということだ。

入り組んでいる民族や宗教に例えると、まるでユーゴスラビアの国々のようだ。

鍾乳石の成長速度は地下水の量などによって変わり、1mm 成長するのに 10 年~30 年かかる。ポストイナ鍾乳洞は未だに成長を続けている。地球という生命体はこの芸術を造り続けるのか。

時間も忘れて歩いているうちに地上に戻るトロッコ電車の乗り場にたどり着く。線路は複線になっていて往路と復路のルートが違い、ここは到着した場所でなく初めての場所になる。

とても大きな空間で近代的な売店やトイレもある。高さ 20m くらいあるクリスマスツリーが青い照明で輝いている。とても鍾乳洞の中とは思えない。



鍾乳洞内の温度は8°C、一年中変わらないという。今は外気温が氷点下なのでむしろ快適だが、夏に来るとなると防寒対策が必要だろう。

外に出ると雪が降っている。私が今シーズン初めて体験する雪がスロベニアだという幸せを感じながら雪道をバスに向かう。鍾乳洞の中が如何に快適だったかを深々と降る雪が教えてくれる。

## 第二章 ローマ時代

### ■スラブ人とは

辞書を引くと、スラブ人とは中欧・東欧に居住し、インド・ヨーロッパ語族スラブ語派に属する言語を話す諸民族集団とある。ひとつの民族を指すのではなく言語学的な分類に過ぎない。

具体的には東スラブ人はロシアやウクライナなど、西スラブ人はチェコ、ポーランドなど、そして南スラブ人が今回の訪問国のクロアチア、セルビア、ボスニアヘルツェゴビナなどになる。

私が注目したのはこのスラブという単語である。実は英語の奴隷 **slave** の語源なのだ。これはスラブ人が昔から奴隷として扱われていたということの意味している。

ただし、古代ローマでは奴隷といっても私たちの持っている印象とは異なる。社会・経済分野で重要な役割を担っており肉体労働や接客業務だけでなく高度な知的労働にも従事していた。

ローマ帝国の時代になっても基本的には同じだ。その証拠にローマ帝国の言葉であるラテン語で奴隷は **servus** なのだ。こちらはむしろ英語のサービス **service** に近い。

つまりローマ時代は奴隷といっても立派な社会の構成員だったが、中世になると西ヨーロッパの強国が覇権を握り、奴隷とはこの地域に住む人たちを指し同時に支配して従わせる対象になったのだろう。

その西ヨーロッパの強国とはローマ帝国以降はベネチア、ハプスブルグ家のオーストリア、フランス、ナチスドイツなどで、それらの国から絶えず侵略を受け服従を強いられた。

付け加えると東からもオスマン帝国の支配が 300 年以上も続いた。

### ■ローマ皇帝の隠居場所

スピリットは人口 20 万人、クロアチアのアドリア海沿岸地帯最大の都市でももちろん旧市街は城壁に守られている。城壁の周囲が約 1km なので旧市街は簡単に見てまわることができる。

この街はローマ帝国の皇帝ディオクレティアヌスの隠居の宮殿ができたことで始まった。そしてベネチア共和国に支配されるので街を歩くとローマとベネチアの両方を感じることができる。

街の真ん中に大聖堂があり、この建物はディオクレティアヌスの霊廟だった建物が 8 世紀にキリスト教徒によって大聖堂に改修された。彼が皇帝だったのは 3 世紀末から 4 世紀初めで、その時にキリスト教を迫害したので 500 年経った後の時代になっても恨みが消えなかったらしく、彼の遺品や石棺もことごとく破壊されたという。



今回はイタリア旅行ではないのでローマは主役ではないが、私にとってはローマという都市は歴史的に大変興味深い。

古代ローマはキリストが生まれる前なのでキリスト教はなく、ギリシャ神話の神々をローマ語に変えて信仰していた。ローマ帝国になりキリスト教が生まれるが、しばらくはキリスト教を迫害し、そしてその後は国教にした。現在はローマの中にあるバチカンがキリスト教の最大宗派のカトリックの総本山になっている。

ヨーロッパ文化とはキリスト教文化と言っても過言ではない。そしてローマはキリスト以前と迫害と蜜月の歴史がそろっている。

話をスピリットに戻すと、大聖堂に併設されている高さ約 60m の鐘楼がある。私たち夫婦はバルト 3 国の旅以来、すっかり鐘楼登りに目覚めてしまい早速これに登る。

上りと下りが交差しない螺旋階段だが、狭くて急で危ない。一応手すりはあるが用をなしておらず転落してもおかしくない。安全管理に厳しい日本では到底許可されないだろう。

落ちないように細心の注意を払って登ると、展望台からはスピリットの街を一望できる。赤茶色の瓦の屋根の家々がひしめき合っていて並んでいる。反対側には海がすぐ近くまで迫って来ている。港の傍には鉄道の駅がある。クルーズで来れば上陸して鉄道で内陸に簡単に行ける。



#### ■ローマ帝国がもたらした繁栄

クロアチアのアドリア海沿い都市でザダルに立ち寄る。

この街も長い歴史を持っておりローマ帝国に支配され、そこから繁栄した。だからローマの水道橋やローマ建築も目に留まる。

ローマ帝国による支配とは植民地として搾取し支配するのではなく、属州としてある程度の自治権を与えて共に繁栄するという。だから技術を教えたり、開墾を手伝ったりもする。

全ての道はローマに通じるという言葉がある。ローマに続く道は戦車が走るの非常に重要だ。当時の戦車というのは馬が引く 2 輪車で、これが高速で安定に走るためにはカーブの角度、傾斜、道幅の規格を決めてそれどおりに均一に作らないといけな。そのためには測量や土木技術というものが需要で、それらを教えて道路を作ることになる。

そうやってローマ帝国は長期に渡りヨーロッパを支配していた。

話はそれるが、そのローマの戦車の車輪の幅が現在の鉄道の国際標準の軌道、つまり標準軌になっている。残念ながら日本の在来線は訳あってそれより狭い狭軌が採用された。しかし、ようやく新幹線ではじめて標準軌を採用することができた。ローマに遅れるところ 2000 年か。

日本の在来線に狭軌が採用された理由は、技術導入をしたイギリスから日本は国土が狭いから狭い軌道でいいですかと聞かれ当時の担当大臣がイエスと答えたからだという。この狭い軌道はアフリカの植民地用のもので南アフリカのケープタウンになぞってケープ軌道とも呼ばれている。

全くもって寂しい話で、政治家は世界を勉強して 100 年後を見て仕事してもらいたいものだ。これは日本の近代化における三大失敗の一つと言われている。

この街は 13 世紀に第 4 次十字軍に襲撃され陥落した。

十字軍はキリスト教の対イスラム教への勢力奪回の軍隊なのに同じキリスト教徒の街を襲撃するのは解せないが、やらせたのはアドリア海の覇権をめぐるハプスブルク家のハンガリーと対立していたベネチア共和国だ。

これを足掛かりにアドリア海沿岸の都市国家の多くはベネチアの支配化に入っていく。

ベネチアとはそういう存在だったのかと初めて感じる。3 年前にベネチアに行って感じた綺麗な都市国家はここでは征服者なのである。

旧市街は海に突き出た半島に築かれている。この街の中にはローマ時代の井戸や柱などが多く残っており、それに加えてベネチア時代の城門や凱旋門もある。

その中で 9 世紀、つまりその 2 つの時代の間でできた聖ドナト教会は円柱状の建物だ。私はこういう形の教会を初めて見る。教会というのは四角いもので、上空から見たら十字架の形になっているのがほとんどで、このように丸い形は実に珍しい。



ザダルの海岸にはシーオルガンという芸術作品がある。別にオルガンが置いてあるのではなく、コンクリート製の海岸の堤に埋め込まれており見た目には分からない。海に面した横方向に穴が開いていてその穴から海からの波や風をパイプに取り込み、上の方に開いた丸い穴から空気が出て音を出す構造になっている。

自然が奏でる不思議なメロディを聞くことができる。これはもちろん現代の作品である。



### 第三章 繁栄の中世ヨーロッパ

#### ■アドリア海の真珠

アドリア海に面したクロアチアの最南端にかつて繁栄を誇った都市国家のドブロブニクがある。ここは15世紀にはベネチアと並ぶ貿易都市として栄えた。

この都市国家は城壁に囲まれた要塞都市で、当時としては先進の都市だ。それはまず設備面で上下水道が15世紀に完備されたこと。そして政治面では自由と独立を重んじており、周辺の都市国家がベネチアに支配される中で独立を保ったという。それには武力や政治力というあらゆる手を使って守ったともいう。だから「ドブロブニクの自由は世界中の黄金をもってしても奪うことは出来ない」という言葉まで残している。

この街はとにかく美しいので「アドリア海の真珠」とも呼ばれている。さらにあまりの美しさに「ドブロブニクを見ずして天国を語ることなかれ」という名言まで生まれた。

海と山の間に分厚い城壁に囲まれた旧市街がある。城壁の周囲は約2kmで街は比較的小じんまりしている。その街の中はというと石畳の道が敷き詰められて教会、レストラン、土産物店などがある。

そして現在も住民が住んで生活をしている。それも古い当時の家を利用しているので、アパートではなく一軒の大きな家を分けて住んでいるようだ。

私と妻は城壁の上を一周回ることにして入口で入場料一人当たり 150 クーナ (kn)、日本円で約 2700 円を払い城壁に登る。城壁に登るだけで 2700 円は高いと思ったが、直ぐにその思いは吹き飛んでしまった。

そこには、青空のもとに美しい街が海と山に囲まれて存在している。

ざっと街を見渡すと建物の屋根のオレンジ色、建物の壁のクリーム色、石畳の白などの様々な色が見事に調和して、私たちの目の前に広がっている。海はもちろんアドリア海で、太陽に照らされてキラキラ輝いている。



城壁に登ると先客がいて写真を撮っている。私たちより少し年上の鶴田さん夫妻、そしてちょっとお洒落なマダムたちは鳥海さんと大山さんだ。この人たちは同じツアーの客で、この旅でいろいろお世話になり、自由行動の食事は私たちも入れて 6 人一緒にとることにもなる。

城壁を一周するのに、写真を撮ったり世間話をしたりで約 2km のハイキングに 1 時間半ほどかかってしまう。

自称アマチュア旅行写真家の鶴田さんは写真を撮りまくっている。城壁から見える内外の景色や、それを背景に奥さんや私たちを撮ってくれている。彼は「こんなに写真を撮ったのは初めてだ」と興奮気味に私に言う。

この光景に感激しているのは私だけではない、それほどまでに素晴らしいと彼も感じているのだろう。

城壁から見えるものは綺麗な景色だけではなく、人々の生活を感じさせてくれるものも、さりげなく見ることができる。窓から干している洗濯物、自転車、バスケットボールの練習コート、運動場などが目に留まる。

ここは単なる観光地ではなく、人々が暮らしている。この街の住民は 1000 年以上も前から自由を守りながらたくましく生きている。



ドブロブニクは海洋都市国家なので小さな港があり、そこからクルーズ船が出ている。クルーズと言っても十数人でいっぱいになるグラスボートで、すぐ隣にあるロクルム島を回って帰って来るという約1時間の船旅になる。

ロクルム島には修道院があるが、今は無人島で深い緑に覆われている。夏は観光客が海水浴に訪れ賑わうという。島の反対側はヌーディストのビーチがある。船はその反対側に回り込むが残念ながらヌーディストたちも冬は訪れないらしい。またヌーディストという言葉はあまり印象が良くないので自然のままという意味をこめて今はナチュラルリストと呼んでいる。

船からはドブロブニクの城壁の外にある検疫所を見ることができる。今も昔も船で運ばれてく

るのは貿易品だけではなく疫病が最も怖い。これを防衛するためにここにやって来た船乗り全員を検疫所に40日間隔離したという。40日もあればほとんどの伝染病の潜伏期間はカバーできる。



日本からのここに来る乗り継ぎ便の飛行機の中で、隣に居合わせたセルビア人の太ったおじさんに旧ユーゴスラビアの国々の観光地の中で最もお勧めは何処かと聞いた。すると彼は自慢げにクロアチアのドブロブニクがいち押しだという。セルビア人の彼が隣国を勧めるとは驚きだ。景観も素晴らしいし、何よりも歴史が素晴らしいと盛んに言っていた。

この街を見終わって、彼の言葉に嘘はなかったと改めて思う。

話のついでに、旧ユーゴスラビアでどのくらい言葉が通じるのか知りたくて言葉の質問をする。

セルビア人の彼はクロアチア人とは普通に会話でき、same（同じ）とも言っていた。スロベニアはちっと違うと言うが、通じるという。その隣のイタリアはどうかと聞くと、だいぶ違うが何とか通じるという。

日本人の私は、隣の韓国や中国とは何も通じない旨を伝えると、彼からは漢字があるじゃないかと返ってきた。何と素晴らしい。

#### ■昼食は、ぼられたか

ドブロブニクの城壁の中の旧市街を歩き始めたのがまだ朝早い8時過ぎであったので観光客もまばらで世界的に人気の観光地にしてはすいていると感じてしたが、城壁巡りとクルーズを終えて11時を過ぎようとしている今は多くの観光客でごった返している。

レストランが混む前に早めに昼食をとった方が良さそうなので城壁巡りをした面々と店を探していると片言ながら充分に聞き取れる日本語で現地人らしいおばさんに声を掛けられる。彼女はレストランの呼び込み役で、メインストリートに出てきて日本人客を誘っている。まあ、渡りに船というタイミングなので誘われるままに彼女についていくと狭い路地の小さなレストランに案内される。入店すると私たちが本日のお客第一号らしく、誰もいない。雰囲気も悪くないのでここに腰を落ち着けることにする。

写真付きのメニューがあれば見せて欲しいと頼み、その中に海鮮盛り合わせのセットメニューがある。こちらの食事はボリュームがあり日本人には多いので一人前をシェアして食べようという事で、2人で1つを注文してビールを飲みながら待つことになる。

ここに居る面々も、今回の旅行に参加しているツアー客は誰もが50カ国くらいは世界を旅している。私たちもこの旅で訪問国は55カ国になる。旧ユーゴスラビアの国々に来る人たちは旅のベテランばかりだ。当然のように旅の話で盛り上がる。

鳥海さんは仕事で南極への船旅を4回もしている。1回が4カ月程で16カ月、南半球の寄港地は非常に詳しい。私たちも地球一周、オセアニアの船旅をしたので、話はいきなり盛り上がる。

それだけの船旅経験者の彼女は人生で一度も船酔い経験がないと自負している。その隣の大山さんはその類のことには弱いようで一緒に鐘楼に登ったが、高所が苦手らしく途中で断念する程だ。それなのにこのマダムコンビは何故かコンビネーション抜群だから人間の相性とは面白い。

鶴田さん夫妻は気に入ったところには何度でも行くという。それも定点観測をしているという。例えばパリの街のお気に入りの場所に数年毎に訪れて、いつも同じアングルで写真を撮っているという。街は変わらないが自分が変わったことや、その逆で街の変化も感じるという。

少なくとも私にはなかった発想だ。世界100カ国を目指す私たちは海外旅行でリピータは難しいが、国内旅行なら出来そうだ。

そしてもうひとつ素晴らしいことを聞いた。孫が何人かいるが、その孫が中学生になる時に本人が行きたい海外の国に旅行に連れて行くという。夫妻の言葉を借りれば、「一本釣り」で連れて行くという。孫にとっては初めての海外旅行に親ではなく祖父母と行く。兄弟も友人もいないのでプチ一人旅で、中学生になる頃の年齢であればそれは良い経験になる。親にとっては金も掛からずに子供を海外経験させてもらえる。連れて行く老夫婦にとっても刺激があつて面白い。全ての関係者がWin—Win—Winの関係になる。

是非私たちもやりたいと思うが、昨年生まれた双子の初孫たちが中学生になるのにまだ10年かかる。資金を用意し健康維持をしないといけない。双子なので一本釣りにならないか。まあ、その時に考えよう。

こういう情報も得ることができるから、旅の触れ合いは楽しい。

そんな話で盛り上がっていると料理が出てくる。ヨーロッパの内陸ではお目にかかれない海鮮中心の料理でパエリアのようだが米の代わりにポテトや豆、そして野菜も多く使われている。それらを土台にして数種類の白身の魚やエビや貝が2人分ずつ乗っている。当然、別の皿に出されたパンは食べ放題なので夫婦で食べる分量としては丁度良い。

そして味はもちろん美味い。日本料理ほどに繊細ではないが塩味が適度に効いている。そう言えばアドリア海は海塩が有名で土産物として多く売っている。早速買って帰ることにしよう。

周りを見回すと席は結構埋まってきており、それも日本人が多い。あの呼び込みのおばさんの頑張りが結果を出している。



さて、勘定の段になって請求金額を見て驚く。計算を間違えているか、日本円で約 7000 円だ。えーっ、ぼられたか。

夫婦で海鮮セットを一皿とビール一杯でこれは高い。それにパンもあったか。いずれにしてもその 1/3 くらいを想定していたので皆の顔がちょっと引きつる。最初に別会計をお願いしていたが 6 人分と間違えたのかと店員に確認すると、これだからこの値段だとメニューを見せられる。英語表記もあり確かにメニューの最後の方に海鮮セットがある。値段は現地通貨だがほぼ合っている。ただ for 2 person と括弧付きで記されている。もともと 2 人向けの料理だったのだ。だから魚やエビが 2 人分ずつあったのだろう。

それにしても高いが、ここは世界有数の観光地だ。あの客引きのおばさんの働きもあり、何よりも美味かったので良としよう。

#### ■海洋都市が続く

アドリア海沿岸にはドブロブニクのような海洋都市が点在している。

モンテネグロのコトルにやって来る。この国もこの都市も日本では知っている人は少ない。

コトルはコトル湾の奥まった場所にあり、海岸線のすぐ近くをバスが走る。海岸沿いにある家には船が付けられる栈橋のようなものがあるが、それがオモチャのように感じられる。

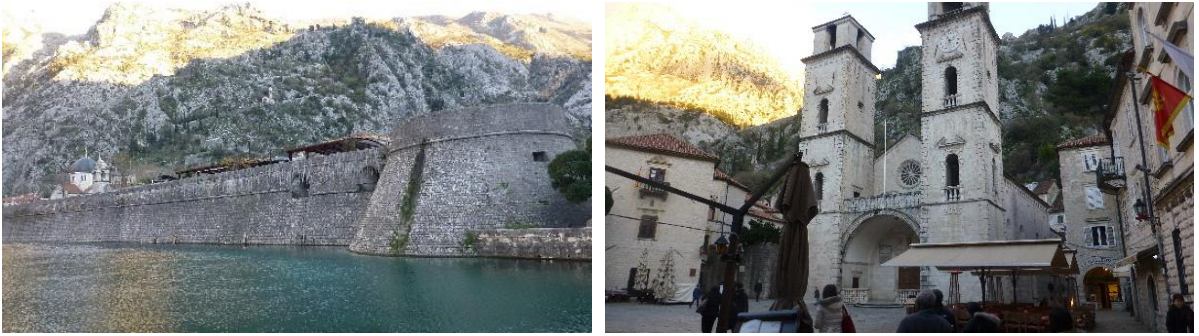
何故そう感じるのかというと栈橋の高さがないからだ。それはちょうど庭園の池に設けられた鯉にエサをあげる足場のようだ。

ここは地中海の中のアドリア海、太平洋と違い月の引力の影響をほとんど受けないので潮の満ち引きがほとんどない。入口が非常に狭いコトル湾のさらに奥の入り江なので波が少ないからだ。

コトルの旧市街地は城壁に囲まれているが、前に海、後ろに断崖絶壁の山、その山の中腹位まで城壁が繋がっている。あんな山の上からの外敵の侵入があったということだろう



ドブロブニクよりひとまわり小さくて古い。城壁の修復もあまりしておらず昔のままという感じがする。これはこれで趣があって良いかもしれない。



プリモシュテンという街がある。神奈川県江の島のような島で、今は本土と橋で繋がっているが昔は敵に攻められないように橋がなかったという。直径 300m というから江の島より小さい。この島を眺める絶好ポイントにドライバーがバスを止めてくれたので写真を撮る。



ザダルに行く途中にあるクルカ国立公園に立ち寄る。展望台から見るスクラデンの街がとても綺麗だ。天気が良く、風も無い。そのためクルカ川は鏡のようになり、そこに映るスクラデンの街や渓谷が見事な絵になっている。ここも中世ヨーロッパの街だ。



## ■ オレンジも中世ヨーロッパ

ドライブインで面白いものを見つけた。オレンジの自動搾り機だ。



元々のオレンジ原産地はインドのアッサム地方で、15世紀の大航海時代にポルトガル人によりヨーロッパへ伝えられた。その後地中海品種のオレンジがアメリカ大陸へ渡り、突然変異で生まれたのがバレンシアオレンジで、この突然変異を発見したのがスペインのバレンシア出身の農民でそう名付けたという逸話がある。

アドリア海沿岸もオレンジの産地だ。

ドライブインのオレンジを搾る自動搾り機は、自動販売機王国の日本といえども見たことがないタイプだ。たくさんのオレンジが無造作に積んであって、スイッチを押すと押している間はその搾り機にオレンジがどんどん落ちてきて、それを機械が自動的に潰して搾りたてのジュースが排出口からしたり出てくるというものだ。

買い方は簡単で、カウンターでお金を払いグラスを受け取る。23Kn、約400円はやや高いが、搾りたては実に美味い。中世ヨーロッパを感じながら飲み干した。

## ■ ブレッド湖は神秘的

スロベニアの北部、オーストリアの国境近くの高原にブレッド湖がある。東西2120m、南北1380m、周囲6kmという楕円形の湖である。湖面から高さ100m断崖絶壁の上にブレッド城がある。波のない湖面に城が映り神秘的な雰囲気を感じさせてくれる。



湖の中にブレッド島という小さな島がある。この島がスロベニア雄一の島ということにも驚く。

私たちは手漕ぎボートに乗ってその島を目指す。といっても自分で漕ぐのではなく専属の漕ぎ手が操るボートだ。そのボートも、漕ぎ手という職業も先祖代々受け継いでいるという。だからボートは大事に手入れされており、漕ぎ手もその辺のアルバイトではない。

漕ぎ手は背の高い若いイケメンで、おばさんたちの熱い視線が集まっている。代わる代わる彼と写真を撮っている。彼も悪い気はしないようだ。おばさんパワーはここでも健在だ。

ボートは非常にゆっくりと進む。まるでこの街の時間がゆっくり流れているかのようだ。



島は小高い山になっていて階段をちょうど 100 段登った頂上には教会がある。この島の教会で結婚式をあげるカップルは船で着いて、この 100 段の階段を新郎が新婦を抱きかかえて登るといふ儀式とでもいう習慣がある。だからこの教会で結婚式をあげることが決まったカップルが最初にすることは新婦がダイエット、新郎が筋トレに励むことだという。

実際に 100 段の階段を登ると角度が急なこともあって結構きつい。ましてや新婦を抱きかかえて登るのは苦難だろう。結婚とはそういう苦難なものだということを最初に体で感じさせるには絶好の機会かも知れない。

島にある聖母被昇天教会は 8 世紀頃に創建され、17 世紀に現在の姿になった。隣接して鐘楼もあり、鐘楼づいては私たちがこれを見逃すわけない。鐘楼からはブレッド湖が綺麗に見渡せる。

#### ■クラバット

クロアチアはネクタイ屋が多い。それはネクタイの起源がクロアチア兵だからだ。

時は 17 世紀、フランスに派遣されたクロアチア兵は無事な帰還を祈って妻や恋人から贈られたスカーフを首に巻いていた。それを見たフランスのルイ 14 世が興味を示し側近に「あれは何か」と尋ね、側近がスカーフではなく兵士だと勘違いし「クロアチア兵（クラバット cravat）です」と答えたという。歴史では良くある話だ。

だからフランス語ではネクタイを cravat という。日本人は英語に触れる機会が多いので馴染みがないが、スペイン語、ドイツ語、イタリア語などもクラバットと同じような発音をする。

## 第四章 激動の 20 世紀

### ■ 第一次世界大戦はここから始まった

サラエボ市内を徒歩で観光する。

今は博物館になっているが、この街を世界的に有名にした喫茶店がある。

時は 1914 年 6 月 28 日にオーストリア・ハンガリー帝国、いわゆるハプスブルク家の皇太子夫妻が暗殺された事件で、この事件がきっかけとなって第一次世界大戦が始まる。

私たちは今、暗殺現場に来ている。博物館に入館せずとも壁に当時の写真を見ることができる。

ガイドの話では暗殺はいくつかの偶然で成功したという。運転手が道を間違えたのでそれをわざわざ引き返したとか、だから車列の後続車が手りゅう弾の爆弾テロにあい皇太子夫妻は市庁舎に一旦避難したのにお見舞いに戻ったところ、この喫茶店でサンドウィッチ食べていた暗殺団のひとりが皇太子夫妻の通過を偶然に知り、喫茶店の前で犯行におよび射殺に成功した。

これらのいくつかの偶然が一つでも無ければ第一次世界大戦はなかったかも知れない。そうするとドイツが敗戦し、その後のナチスドイツの台頭も、日独伊三国同盟も、第二次世界大戦もなかったかも知れない。まさしく歴史とは偶然の産物だ。



サラエボは複雑な街だ。街の真ん中に東西を分ける印が道路にある。ここを境に街の雰囲気が一変する。

東側はイスラム教のモスクがある。西側は複雑でカトリックの教会、セルビア正教の教会、さらにユダヤ教の会堂まである。何故ここにユダヤ教の会堂があるのだろうか。それはオスマン帝国がイベリア半島で迫害されたユダヤ教徒を受け入れ、この地域に移住させたからだ。

小さな街でこれだけの宗教施設を見ることができるのは恐らくここだけだろう。

サラエボの歴史は、ローマ帝国の支配地域にスラブ人が入ってきて街ができる。15世紀にオスマン帝国に支配され、その後はオーストリア・ハンガリー帝国に支配された。皇太子暗殺が第一次世界大戦に発展しオーストリア・ハンガリー帝国は滅亡したが、第二次世界大戦中はナチスドイツにも支配された。その後はユーゴスラビア連邦人民共和国になった。

1984年には冬季オリンピックもここサラエボで開催され、一応安定したかに思えたが1992年から独立戦争いわゆる内戦が始まり1996年に終わったばかりだ。

この内戦が複雑で、独立を阻止するセルビア主体のユーゴスラビア軍とボスニアヘルツェゴビナ内のセルビア人が一緒になってサラエボを4年間も包囲し攻撃した。戦闘は激化し死者も多数出て、市民は地下トンネルを掘って脱出する者も多く出てきた。その結果、内戦が終わった時には人口が6割にまで減っていたという。

この地域はいわゆる東西の強国の支配の狭間で苦しむ小国というだけでなく、地域内にも対立を抱える。まさしく火薬庫たるゆえんだ。

内戦ではたくさんの銃弾が降りそそいだ。だからか土産物として面白いものを見つけた。



なんと本物の銃弾だ。

銃弾を加工して土産物として売っている。もちろん火薬は入っていない。

実際に加工している店を訪れて20mm機関銃の銃弾を加工したものを2つ買ってきた。確かに直径は20mmある。真鍮の筒になっている銃弾の後部に切りかきを入れて栓抜きにしたもの、そしてボールペンの芯を差し込み外側に模様を彫刻しクリップを付けた銃弾ボールペンだ。

こんな土産物や商売があるなんて驚くが、店を切り盛りしていた店主兼加工職人は20代後半くらいの若者だ。

現在失業率49パーセントのこの国では貴重な産業なのかも知れない。何しろ材料はたくさん転がっている。

## ■ユーゴスラビアの建国と崩壊

現地の言葉でユーゴスラビアとは「南スラブ人の国」を意味し、国名としては分かり易い。

ユーゴスラビアという国は現在存在していないが、私にとってこの国の予備知識はほとんどなく、訪れて初めて知ることが多い。

その歴史は第一次世界大戦が終わってから始まるが、その後85年間の変遷が凄まじい。

1918年、母体になるスロベニア人・クロアチア人・セルビア人国が成立

1929年、ユーゴスラビア王国

1943年、ユーゴスラビア民主連邦

1946年、ユーゴスラビア連邦人民共和国

1963年、ユーゴスラビア社会主義連邦共和国

1992年、ユーゴスラビア連邦共和国

2003年、セルビア・モンテネグロが成立し、ユーゴスラビアの国名が消滅する。

驚くべきことは 1941 年に日独伊三国同盟にも加わっている。ドイツとの関係からの加盟だったようだが、それもあって第二次大戦中にも内部で分裂をしている。

そして第二次世界大戦後の 1946 年にチトー大統領がユーゴスラビア連邦人民共和国を作った。以後 30 年以上に渡り彼がこの国をまとめていった。

その彼が作ったユーゴスラビアを表す有名な言葉がある。「7つの周辺国との国境、6つの共和国、5つの民族、4つの言語、3つの宗教、2つの文字、1つの国家」というもので、複雑怪奇な国の状況を非常に良く表している。これをまとめ上げたチトー大統領とはバランス感覚とカリスマ性を持つ凄い政治家だったのだろう。

この「7つの…、6つの…」を日本に当てはめるとどうなるか。まず、まわりが海なので国境を接する国はない。そしてその他の項目は全て1つになる。まあ全てが完全に1つでない部分もあるかもしれないが、ほぼ1つだ。そんな日本人の我々がこのユーゴスラビアを理解することは困難なことかもしれない。

オール1の日本だから、暗黙の了解、和の精神とかが生まれたのだろう。それが日本文化の根底に流れているのに違いない。

#### ■ユーゴスラビアの首都

ベオグラードは現在のセルビアの首都で、ユーゴスラビアの首都でもあった。ヨーロッパ第二の川であるドナウ川とその支流のサヴァ川の合流する地域にある。

その合流地点を見下ろす高台にベオグラード要塞がある。戦火が途絶えない地域なので要塞の役割は大きい。城壁は幾重にもなっていて支配者が代わると強化するので進化の跡が見てとれる。

要塞の門をくぐり抜けると面白いものが展示してある。大砲、戦車、ミサイルといった兵器だ。もちろん使用できないだろうが本物だ。朽ち果てたレンガの城壁との対比が、それら兵器というもの如何に虚しいかを訴えているように感じられる。



その城壁をもう一つこえると恐竜の模型が 20~30 体ほど飾ってある。模型といっても恐らく原寸大で迫力もある。しかしながらあまりに唐突で、何の目的の展示なのかは私には理解できない。

さらに進むとテニスコートがある。テニス世界 1 位だったジョコビッチが練習したというテニスコートだ。そういえば彼はベオグラード出身だ。

ベオグラードの街は未だ混とんとしているように私には見える。

聖サヴァ教会に行く。

この教会は 1935 年から建設しており、昨年地下ホールができたばかりで 1 階のホールは内装工事中なので現在は地下ホールのみを公開している。地下ホールは見事な仕上がりで黄金の間に壁画がたくさん書かれている。古い教会は当たり前だが、真新しい教会を見る機会は滅多にない。

だから、とても感激する。そして新鮮だ。

それにしてもこの教会はいつ完成するのだろうか。あと 17 年で 100 年になるのに。



ベオグラードはユーゴスラビアの首都だったので、ユーゴスラビア歴史博物館がある。その中にチトー大統領の霊廟になっている花の家がある。今は花の季節でもないので景色はいまひとつではあるが、建物の正面には 6 つの国を意味するか 6 人の彫刻がある。

彼が死んだ 10 年後に激しい内戦による分裂劇が起こるとは、そこに眠る本人もさぞ悲しんでいることだろうか。

いや、むしろ「これでワシの偉大さが分かっただろう」とも聞こえてくる。確かにこんな複雑な地域をまとめあげられるのは「貴方以外にはできませんよ」と言わせたいのかもしれない。

私はそんなことを考えながら手を合わせて花の家を後にする。

ちなみにチトーは本名ではなく、本名はヨシップ・ブロズという。チトー (Tito) の意味とは、Ti は英語の You で、to は英語の do なので日本語にすると「お前がやるのだ」という文言になる。さすがにバランス感覚のカリスマだ。自分でやらない。

いや違うか、国民全員で行動しようが本意なのだろう。

#### ■1993 年を忘れるな

サラエボからアドリア海に向かう途中の渓谷にモスタルという世界遺産の街がある。ここには 16 世紀に造られた美しいアーチ状の古い石の橋を見るために観光客が多く集まってくる。モスタルという地名はボスニア語で「橋の守り人」という意味で、橋が街を発展させたのだ。

私が驚き感心したのは橋の歴史的価値ではなく、この橋が破壊され再生させたという事実だ。

第二次世界大戦においても、この橋はその美しさからナチスドイツも爆撃をしなかった。  
しかしながら内戦によって橋は 1993 年に完全に破壊された。

1991 年から 1994 年までこの地域をヘルツェグ=ボスナ・クロアチア人共和国がモスタルを首都として独立国家を名乗っていた。クロアチア人の国で政治情勢は極めて不安定だった。そして独立を抑え込もうとするボスニアヘルツェゴビナとの戦いの中でクロアチア勢力が破壊した。

現在見ている石橋は 2004 年に修復再生されたものだ。

川に落ちた一つ一つ全ての石橋の破片を拾い集めて組み立てていく。それはジグゾーパズルを立体化したような途方もない作業になる。ジグゾーパズルには正解があるが、こちらは必ずしも正解はない。正解が見つからない場合は 16 世紀当時の石切場から同じ年代の石を切り出し埋め込むという大変な作業をこなした。

「DON'T FORGET '93」、1993 年を忘れるなという文字が橋の渡り口に書かれている。



## 第五章 現代

### ■相変わらずの争いごと

旧ユーゴスラビアの時代は一つの国であったが、現在は独立した 6 つの国になっている。北からスロベニア、クロアチア、セルビア、ボスニアヘルツェゴビナ、モンテネグロ、マケドニアだ。そしてその中でもまだ争いごとが存在する。

現在のセルビア共和国の中には独立係争中のコソボがある。コソボの名前は聞いたことがある人が多いと思う。



2018年現在でコソボを独立国として承認しているのは日本や欧米の116カ国だが、問題は当事者のセルビアをはじめロシアや中国が認めていないのでコソボはセルビアの自治州の扱いになっている。

セルビアはユーゴスラビアの中心で首都も置かれていたが、どんどん周辺国が独立している。それはちょうど子供たちが家から出て行って夫婦二人になった老夫婦の家に似ている。そして今度は奥さんが家を出たいと言い出しているようで、私には何だか可哀そうでならない。

そしてもう一つの係争はマケドニア共和国だ。現在、国連ではその名前は認められていない。

その名前は紀元前4世紀の有名なアレキサンダー大王を出したマケドニア王国に由来する。当初はギリシャ人が多く住んでいたがスラブ人が侵入し、そしてオスマン帝国の支配下になる。その支配下においてもマケドニアは地域としては存在していた。

1910年代のバルカン戦争によって古代マケドニア王国の領土はギリシャ、セルビア、ブルガリアの3国の領土に分割され編入された。その比率はギリシャが約50%、セルビアつまりユーゴスラビアだった現在のマケドニア共和国が約40%、ブルガリアが約10%だ。

このような事情なのでマケドニアという歴史的な国名を名乗ることにギリシャなどが異を唱えた。だから国連でのマケドニア共和国の呼称は「マケドニア旧ユーゴスラビア共和国」というややこしい名前になっている。

## ■国境越え

国が独立すると必ず国境が存在し、行き来には国境越えが必要になる。当然私たちの乗っているバスも国境越えを何度もすることになる。

国境は検問待ちのトラックで長蛇の列になっている。国境のはるか手前から渋滞している。10分、20分経ってもバスはあまり進まない。既に日が暮れてホテル到着時間も気になってくる。

すると、バスの運転手が思い切った行動にでる。

対向車線を走り始める。凄いことをやると感心するが、これはやり過ぎだろうともう一人の私の良心が言っている。渋滞の高速道路で路側帯を走るのよりもたちが悪い。

案の定、前から対向車がやってくる。こちらに理がないので元の車線に戻ろうとするが何しろ渋滞中で隙間もない。それでも無理矢理頭を突っ込むが、何しろバスなのでとても入りきらない。車体の半分以上は対向車線に残したままになっている。当然のように前から後ろからクラクションの雨あられである。そんな状態が5分位続いたが前の車が少しずつ進んでようやく元の車線に戻ることが出来た。そしてまた渋滞のノロノロ運転が続く。

そしてまたしばらくして対向車線に出て走り始める。今度は対向車が無く大丈夫らしい。対向車線をすいすいと走り抜け、何とか国境の検問所にたどり着いた。

検問所にはゲートが全部で10あるが開いているゲートは4つで、一番端がトラック専用だ。このゲート目掛けてトラックが長蛇の列になっている。その隣のゲートはバス専用でこちらは1台のバスもない。残りの2つのゲートは乗用車専用で、それなりに混んではいるが待っているのは20台くらいだろう。

この状況が分かっていたのでバスの運転手はあのような暴挙に出たのだ。暴挙と言ったら申し

訳ないか、ああでもしなければあと 1~2 時間は掛かっていただろう。そしてトラックの国境越えがいかにも大変なことだということも身に染みるほど分かる。なんと非効率なことだろう。

国境越えの審査はバスの運転手が降りて事務所に行き、係官の指示を受ける。乗客はパスポートを持参してバスから降りて対面で出国審査を受けて出国が終わる。

それから 100m か 200m 行ったところに今度は入国審査の検問所がある。渋滞はないものの同様な審査手続きをして入国になる。この出国と入国がセットになってようやく国境通過だ。

最初の国境越えは以上のようなことだった。しかしこの日の行程ではセルビアからボスニアヘルツェゴビナに入るのもういいかと思っていたが、なんとクロアチアに入った。国境が入り組んでいるのでしょうがないらしい。そしてまたクロアチアからボスニアヘルツェゴビナへの国境越えを経験する。

今度は渋滞も少なく、審査も簡易でパスポートを集めて渡すだけで対面審査はなかった。その次の国境の審査はパスポートを見せることもなく、運転手が日本人の団体だというだけで通過できた。審査の厳しさは接する国と国との力関係にもよるが、多分に係官の胸三寸らしい。そしてバスの運転者の対応も大きく影響するらしいことが分かってきた。

それにしてもこのような国境越えが今回の旅行では合計 11 回もあった。

国境とはかくも大変なもの、国として独立することが大変なことだと痛感する。その意味で EU は、その国境を無くすのだから凄いことだと改めて感じる。

小さな国々をまとめあげてユーゴスラビアという国家をチト一大統領が作り、大変な内戦を経て 6 つの国に分裂独立した。そしてまたスロベニア、クロアチアの 2 国はもっと大きい国家連合の EU に入った。他の分裂した国々も EU 入りを国家の目標にしている。

分裂と統合の繰り返し、離合集散が人類の歴史なのだろう。どこかの国の政党や企業の M&A も同様かもしれない。そもそも人と人の付き合いも、社会の中で人が生きていくこと自体が離合集散の繰り返しなのだろう。

日本も戦国時代など内戦の時代があり、離合集散を繰り返して今に至っている。そこからの教訓は何かといえば島国や単一民族を活かせという意味ではないはずだ。

地球という惑星に住むという立場になって単一惑星人という発想にならなければいけないと感じる。それが離合集散を繰り返しながらも目指していく姿なのかもしれない。

## ■ザグレブはとても面白い

クロアチアの首都ザグレブはとても面白い。

世界一短いケーブルカーがある。全長わずか 66m、乗車時間は 30 秒、ケーブルカーの横には階段もあり歩いて 5 分だ。世界一長いというのは良くあるが世界一番短いのも十分に面白い。

頂上駅付近はザグレブの街を一望できる絶景ポイントになっている。

その頂上駅近くに失恋博物館というのがある。失恋の辛い過去を思い出させる遺品を寄贈してもらい、心に出来た傷が一日も早く癒えるようにというコンセプトで寄贈品を展示しているユニークな博物館だ。展示品は各国語に翻訳されている。

失恋博物館の近くには聖マルコ教会がある。この教会は私が今まで見たことがないカラフルなもので屋根に描かれた紋章がとても印象的だ。



旧市街地のほぼ真ん中には 100m の 2 つの塔を擁する聖母被昇天大聖堂がある。ヨーロッパの街は大聖堂を中心に街が出来ている。大聖堂は人々の心の拠りどころであり、街のどこにいても大聖堂が見えるので安心感がある。

ザグレブは都会だ。当たり前のように物価もそれなりに高い。

今回の旅行中、物価を測定するために同じ銘柄の 500ml の缶ビールの値段を見ているが、ボスニアヘルツェゴビナのスーパーでは 90 円、クロアチアに入り田舎にあるプリトヴィツエのホテルの近くのスーパーで 180 円、そしてここザグレブ市内のスーパーでは 250 円になっている。

#### ■クリスマスマーケット

ヨーロッパの 12 月はクリスマスマーケットで真っ盛りだ。ヨーロッパでは 14 世紀が発祥という結構古典的な行事らしい。日本ではあまり聞かない言葉だったが、最近の商業主義に押されて日本でも 12 月の大イベントになってきている。

こういうイベントは信仰より金儲けで拡大するのだろうか。しかしながら技術者だった私にはその拡大の要因に興味がある。それは電飾の進歩だ。

電飾はかつて白熱球だったが、エネルギー消費がその 1/10 になった発光ダイオード (LED) の登場で劇的に変わった。さらに日本人が発明した青色 LED の功績が大きい。長年不可能とされていた青色 LED が出来たので全ての色の再現が可能になった。その功績でノーベル賞が贈られた。

当たり前の話だが科学技術の進歩は世の中を変える。クリスマスマーケットは LED で一変した。

ヨーロッパにおける昨年のクリスマスマーケットナンバーワンが、ここクロアチアのザグレブだ。さすがに素晴らしい。電飾が綺麗だということもあるが、街をあげてのイベントになっており市民の手づくり感もあって心の底から楽しめる。

街のいたるところで市民が飾り付け、クリスマスらしい衣装を着て、店を出店し、自分たちで出来ることをして盛り上げている。恐らく規模的にはヨーロッパ各地でもっと凄いところもあるのだろうが、ここザグレブは市民が参加して街をあげての一体感のようなものを感じる。

私が思うには内戦で苦しんだ地域だけあってクリスマスが楽しめるという喜びをみんなで分かち合うという気持ちが大きいのだろう。その意味では日本では真似できないかもしれない。

イエアチッチ広場がクリスマスマーケットの中心で大きなステージがある。ステージでは女性コーラス隊が歌っている。彼女たちの顔からは心からクリスマスを楽しめる喜びが伝わってくる。



夜の街を歩く。

電飾や飾り付けは街の至るところ、どこまで歩いていても際限なく続いている。このイベントが街の一部だけではないと感じる。

ザグレブ中央駅とストロスマエル美術館の間の広場は急造のスケートリンクになっていて、電飾と出店がたくさん出ている。

出店は小さな木造の小屋を白いペンキで塗ったものでデザインもサイズもほぼ統一されている。日本の駅にあるキヨスクの売店くらいで2畳程のログハウス風のおしゃれなものだ。

一台の豪華にクリスマスデコレーションで飾り付けられている路面電車が走ってくる。私はその路面電車に驚く。そんな路面電車は見たことも無ければ想像もしていなかった。

乗っているのはサンタクロースに扮した運転手と車掌、そして乗客は全員が子供たちだ。車掌のサンタクロースは車内の子供たちにプレゼントを配っている。そして運転手は手を振って私たちの前を通過していく。素晴らしい光景を見せてもらった。



#### ■ ミステリーホテル

クロアチアのトロギールで泊まるホテルはミステリーホテルだと添乗員がバスの中で言っている。最近流行りのリノベーションをしたが失敗作だと、それもひどい失敗作だと強調している。

部屋番号だけでは部屋までたどり着けないとか、コンセントがあるのに戸が邪魔で使えないとか、もはやそのホテルの良いところはスーパーが隣にあることだけだとも言っている。

リノベーションとは新しい価値を生むための改修という意味で、単なるリフォームと違う。しかし聞く限りでは価値を生むどころでなく価値を削っている。

人間とは面白いもので、怖いもの見たさなのかこのホテルに興味湧いてくるから不思議だ。

まあ、いきなりびっくりしないように事前に大袈裟に伝えているのだろうと思っていたが、ホテルの玄関に到着すると非常に暗い。営業しているのかと心配するほどだ。ドアを開けて中に入ると奥の方の一角にあるフロントに明かりがポツンとついていて一人担当者がいるという状態だ。ここは確かにミステリーホテルだ。何か雰囲気普通のホテルと違う。

鍵を受け取るとルームナンバーは9と書いてある。フロントに聞くと9は2階だという。ん、何故9で2階なのか、理解できない。どうやら部屋の番号は1から順番になっており、階とは無関係なのだろう。多分1~5が1階、6~12が2階というように連続で番号を付けているのだろう。普通は1階ならば101~105、2階ならば201~というように付与するのが当たり前なのに、何を考えてか連続番号になっている。そうかと思うと6とか6Aとかある。6と6Aは違う部屋だというのだから全く理解できない。6Aではなく7にすれば良さそうなものだ。

1 基しかないエレベータは渋滞していて、なかなか人がはけない。扉を閉めるボタンがないということが20人程の伝言ゲームで伝わってくる。私は仕方なく階段で行くことにする。

思わず「階段は2階に繋がっているの？」と添乗員に聞くと、周りのツアー客は大爆笑だ。みんなミステリーホテルの術中にはまってきている。

部屋は広いが、何かおかしい。ベッドルーム以外に変則的な5角形のリビングルームがある。そこには大きなソファベッドが2つ、さらにエキストラベッドになるソファまである。このリビングルームだけで3人は余分に泊まれそうだ。

心配していたコンセントは普通に使えるようだ。

貸切りかと思える程、私たち以外にお客は誰も見ない。ミステリー感たっぷりだ。

夕食はホテル1階の薄暗いレストランで食べる。私たちが座るテーブルのところだけ特に暗い。

料理はヨーロッパでは珍しい大皿の提供で各自に取り分けさせる。最初にスープ、そして魚料理と続く。魚は胴体を輪切りにし、まるで魚の缶詰のような切り方だ。味はまあまあいける。

他にお客はいないと思いきや謎の一团が現れた。数人の男女で荷物も持っていない。フロントで鍵を受け取る気配もなくレストランのウエイトレスと談笑している。食事だけに来た近所の人たちだろうか、ジャージ姿の人もいる。

謎の一团は私たちと同じ料理を食べている。ただ食べている場所は暗くない。

食事を終えて今度はエレベータで部屋に行くことにする。ここでまた驚くことが、エレベータの表示と実際の階が合っていない。今回の旅行で泊まってきたホテルでは地上階が0階で、その上が1階、2階、3階となっており、このホテルも0階から始まっている。ところがエレベータは日本のように1階、2階、3階、・・・という表示になっている。

フロントやレストランは地上階の0階にあるのにエレベータでは1階だ。訳が分からない。いや、訳は分かるが、何も知らずエレベータに乗ったら部屋にたどり着くのは簡単ではない。

思うに、こういうミステリーホテルは案外これから人気になるかも知れない。

それがリノベーションで得られた新しい価値なのだろうか。

## ■エネルギッシュな歓迎

セルビアからボスニアヘルツェゴビナに入ると田舎道をひた走る。夕暮れはいつの間にか夜になっており電灯もない。曲がりくねった細い道を4時間くらいは走っただろうか、大きな街の灯りが見えてくる。サラエボだ。バスの前方の外気温を示す温度計は0℃になっている。

ホテルに着くと地元の若者たちが音楽と踊りで盛り上がっている。会場はホテル内のレストランだ。私達はその盛り上がりの中を抜けて同じレストランの隅で遅い夕食をとる。

夕食のBGMにしては大音量で歌もあまり上手くない。地元の現代調の音楽と歌がスピーカーを通して食卓に届けられる。最初は何でこんなところでやっているのだと、バス旅の疲れもあって少し嫌気がさしていたが、だんだんと当たり前になってくるから不思議なものだ。

そして空腹がある程度満たされ始めてからは程よい音楽になってきた。

若者たちの活気というのはいいものだ。それもこのような健全なものならむしろ歓迎したいところだ。確かに健全だ。それが証拠に私たちが夕食を終えた 10 時に宴会も終わった。

エネルギッシュな歓迎を受けたものだ。それが心地よく感じるのは、私がこの若者たちと同世代だった頃のエネルギーを感じたからだろう。それは残念ながら今の日本ではあまり感じない。

支配や内戦の歴史を乗り越えてこれから国を作っていく若者たちのエネルギーだ。

## ■最後の晚餐

今回もそうだが、パッケージツアーでは食事もホテルも最初に比べると徐々に内容が良くなっていく。旅が終わってから好印象が残るようにという旅行会社の作戦だ。

そして最後にみんなが集まって食べる食事、いわゆる最後の晚餐は盛り上げるためにそれ相応のレストランに案内してくれる。旅行会社は気を遣い、何かと理由をつけて特別に一杯ご馳走してくれる。貴方たちは特別だという言葉に人間は弱い、特に日本人は弱い。そして私たち夫婦もその言葉にとっても弱い。

今夜の夕食は地元では人気のビアレストランだ。私たちが着いたときは既に満席で大変な賑わいになっている。もちろん予約してあるのでその賑わいの中を通り抜けて奥のテーブルに通された。席に着くとガラス越しに高さ 3m くらいのビールの発酵タンクと貯蔵タンクが目に入る。このレストランはビールの製造工場の隣に併設されている。

早速、旅行社の特別対応に甘えてビール大ジョッキを私も妻も注文する。

さすがに美味しい。

ツアー客もお互いに相当打ち解ける間柄になっており、最後の晚餐は盛り上がる。

すると、積極的で明るい女性客のひとりが「植木さんもう一杯飲めますか？」と聞いてきた。私が「どうして？」と聞き返すと、少し離れた地元客のテーブルを指して「あのジョッキ飲みませんか？」というお誘いだ。

見ると高さ 1m くらいある大きなビールジョッキを飲んでいる家族連れがいる。大ジョッキを高さ方向に長くしたもので、ビール好きの私が人生で初めて見るものだ。



彼女が店員に聞いた話ではあの超ロングのジョッキは通常の大ジョッキ 4 杯分で、価格も 4 倍くらいなので日本円で 1600 円程だという。

早速私は OK のサインを出して、手元のジョッキを飲み干した。

私たちのテーブルにその超ロングジョッキが運ばれてきたのはそれから間もない。よく見るとジョッキではなくビールサーバになっており、下の台の部分には蛇口が付いている。

インスタ映えをねらってツアー客のみんなが写真を撮りに集まってくる。その写真騒動が終わってからようやくビールを注いで飲む。もちろん美味しい。

最後の晚餐は、このビールが花を添えツアー客同士の一体感も増して大いに盛り上がる。

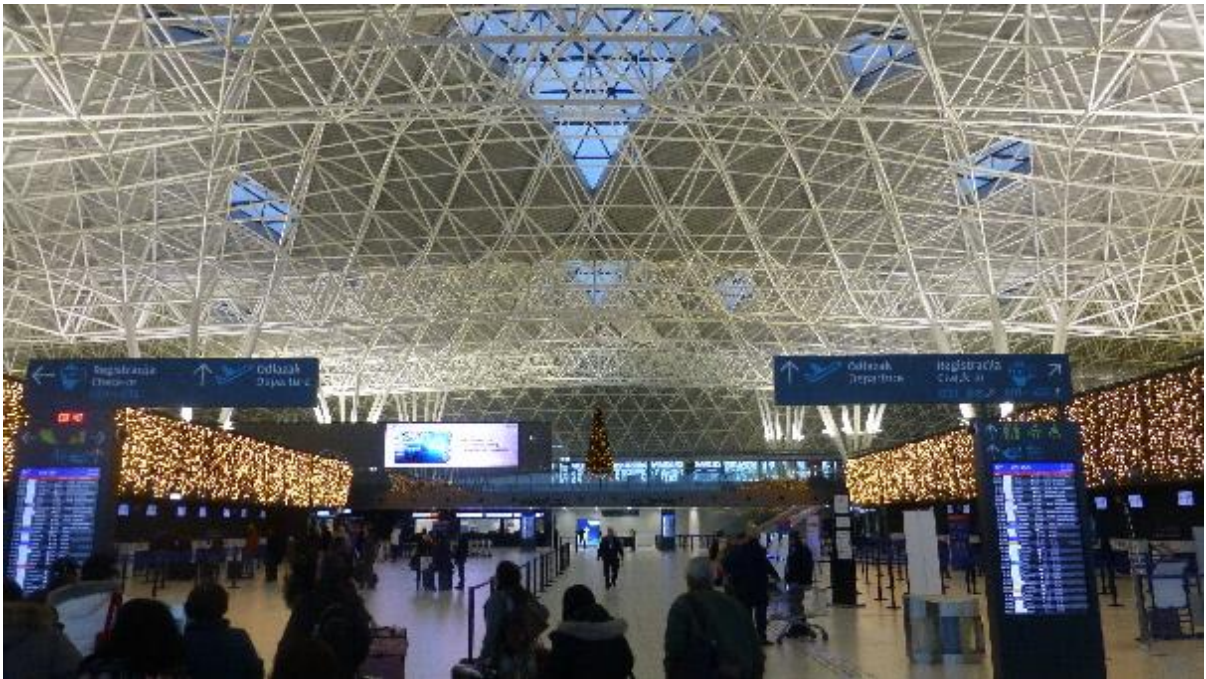
## ■空港にて思うこと

帰途に着くためにザグレブ空港に到着する。空港のビルは新しく、そして斬新なデザインをしている。しかもクリスマスの化粧をしているからきらびやかで未来的な印象を受ける。このクロアチアという国の将来性のようなものを感じとることが出来る。

旧ユーゴスラビアから独立した北部のスロベニアとクロアチアは工業化が進み経済的に発展している。観光資源も素晴らしいものがあり、既に EU にも加盟したので EU 諸国からこれからも多くの観光客がやってくるに違いない。

東西冷戦は西側が勝ったが技術開発や経済発展のために失ったものも多く、負けた東側はそのために古きヨーロッパが残っているという皮肉な結果を招いている。

今回訪れた国々はその東西格差を縮めるべく必死に追いつこうとしているように感じる。そうすると今持っている大自然や中世ヨーロッパの街並みを維持できるか心配になる。



まだこの地域を訪れたことがない人にアドバイスをすることがあるならば、とにかく早く訪れることだろう。この地域は急激に変わろうとしている。

## 第六章 旅のあれこれ

### ■さまざまなツアー客

ツアー客 26 人の半分くらいが中高年の夫婦だ。親子が 2 組、その 1 組は母娘でこれは良く見かけるが、もう 1 組は父娘という珍しい組み合わせだ。そして友人同士、一人参加は 4 人だ。



たまたま食事の時に前に居合わせた人に何処から来たのか聞いたところ、私たちと同じ市内に住んでいる。何丁目、〇〇という店がありますよね。聞けば 30 年前に横浜から移り住んだという。そこまでも同じとは偶然にしても凄い。

同じ植木の姓を名のる人から声を掛けられる。珍しい苗字ではないが、同姓の人と旅行で一緒になることはかつてない。親戚のようで親近感が湧く。

パッと見てアラフォーの女性 2 人連れ、のんびりした感じと積極的で活発な 2 人だ。この活発な方の女性が、結婚したいが相手がいないのであきらめているという。そんなことを本音で平気で語れるのが旅の一つの魅力でもある。

人生何があるか分からないのであきらめてはいけないと、最近私の周りで晩年結婚して幸せになった事例をいくつか挙げて話をしたら結構な盛り上がりになる。結局、私の知り合いの独身男たちを紹介することになる。これは何とか結実させないといけない。

添乗員はベテランでそれなりの年齢の女性なのだが、最初に成田で会った時には真っ赤なハイヒールを履いていた。年齢相応の靴ではない。後で本人に聞いた話では、背が低いので人混みでお客さんが見失わないように足元を見てもらえば分かるようにというアイデアだという。

彼女にツアーの最少人数を聞いた。彼女が過去引率したツアーの最少人数は 2 人だという。その 2 人に対して添乗員、現地ガイド、ドライバーの 3 人、そして南米の高地を歩くツアーなので現地の医者がさらに 1 人、そうすると合計 6 人になりワゴン車のような適当な車が手配出来なかった。そのために普通乗用車 2 台になり、結果ドライバーがもう 1 人追加になったという。

この女性ベテラン添乗員は実にパワフルで、バスの中ではいろいろな話をしてくれた。特に歴史については非常によく勉強している。ところが学生時代の彼女は英語と歴史が大嫌いだったという、今はその 2 つで商売をしているのだから人生とは面白い。

私はそんな歴史好きな彼女に本を 2 冊紹介した。

友人に勧められて大変面白いので瞬く間に読み終わった高木彬光の推理小説「成吉思汗の秘密」、そして今でも私の愛読書で何回も読み返している井沢元彦のライフワーク「逆説の日本史」だ。

驚くべきことは、私が紹介した翌日にスマホの画面を出して「この本ですか」と私に聞いてきて、そのまた翌日には「ネットで発注しました」という。この素早い対応に唾然とするばかりだ。

彼女の行動力の凄さに敬服すると同時に、彼女を動かした私の説明力にも我ながらびっくりする。

#### ■アエロフロートはもう乗りたくない

成田空港からセルビアのベオグラードに行くのにロシアの航空会社アエロフロートを使った。旅行会社のパッケージ旅行なので阪急交通社の都合でこの飛行機会社になったのだが、次はもう乗りたくない。

乗った便はアエロフロートとインドネシアのガルーダ航空とのコードシェア便だ。しかしこの便とインドネシアとは何も接点がない。さらにモスクワ経由ローマ行きというから珍しい。飛行機で〇〇経由という便に乗るのは私にとって初めてだ。

この飛行機はアルコールが出ない。アルコールの提供がないというのは私にとって 2 回目の経験で、1 回目はイランに行くのにイラン航空を使った時でそれはイスラム教の原理主義なのでしようがない。しかし何故ロシアで、不思議でならない。

たまにはこんなフライトも肝臓が休まっていだろうと前向きに捉えて覚悟を決める。

しかしそれだけで済まず、映画などの機内エンターテイメントには日本語がない。これも普通では考えられない。何しろ成田発のフライトなのに選べる言語はロシア語、英語、中国語だけで、昨今の国際政治を反映しているかのようだ。

仕方無く私は英語版のラストサムライを見ることにした。この映画はトム・クルーズ主演のハリウッド映画だが、舞台は日本なので時々日本人同士が日本語で話す時だけ英語の字幕スーパーがでる。その英語の字幕スーパーを何故か安心して読んでいる自分がいるから不思議だ。日本語の音声に英語の字幕スーパーは英語の勉強にはたいへん良い。そう訳すのか、と感心することや気づきがある。

エコノミー症候群解消のために席を立ち、後方の CA たちがくつろいでいるエリアでジュースをもらい屈伸運動をしていると日本の若い女の子 2 人組と目が合い双方からなんとなく話出す。

足が疲れるとか、アルコールないですねとか、彼女たちもワイン位は飲もうと思いきや、この状況に少し嘆いている。もちろん私ほどではない。

アルコールを節約したからかは分からないがこの便は非常に安いという。旅慣れているらしい 1 人の女の子がそう話す。彼女たちは個人旅行でスペインに行くのでこの飛行機を個人的に予約したが本当に安かったという。確かに格安の感じがする。アエロフロートということで人気がないのでガルーダ航空とのコードシェア便で成田発モスクワ経由ローマ行きという設定は何とかお客を集めたいという強い意志を感じる。当然値段も下げることになる。

飛行機は旧ソ連製のボロボロの旧型を想像していたがエアバス A330 で性能も安全性も問題ない。エンターテイメントは確かにシステムもコンテンツも古いが我慢できる範囲で、値段が安ければ個人旅行ならば選択肢に入れるのは十分に理解できる。

モスクワに到着して約 3 時間も乗り継ぎ時間があるので、飛行機でのうつぶんをはらすために空港内のカフェバーでビールを飲む。生ビールのラージサイズが 500 ルーブルほどだ。日本円で 800 円ほどだが、何とも美味しい。

飛行機内でアルコールを提供しないと、空港で収益が上がるのだろうか。

しかし良く考えるとアルコールを出さない、持ち込みも禁止しているのはただ単に経済的理由ではないと思う。日本やアメリカ合衆国では機内で飲み過ぎて迷惑をかける乗客も多い。それは自由というものはき違えた行為で、そんなことは許さないという大国ロシアのポリシーが感じられる。それを示すようにアメニティは充実している。最近のエコノミーでは珍しく機内スリッパ、安眠マスク、歯ブラシまでついている。節約が目的ならばこれらは出ないだろう。

腐っても鯛とは失礼な表現だが、かつての超大国で東側をリードしていたプライドみたいなものを感じる。墮落したアメリカ合衆国や西側諸国とは違うのだと主張しているような気がする。

## ■なかなかやるね、アエロフロート

日本への帰途も再びモスクワ発のアエロフロート便だ。

中高生くらいの日本の若者が15人くらいトロフィーを持って飛行機に乗ってくる。聞けば体操の18才以下日本代表でヨーロッパにて開かれた世界大会で優勝したという。機内では拍手が起こり、写真を一緒に撮ってもらう人もいる。ニッポン、チャチャチャという空気に機内が一変する。

そんなこともありながらも飛行機はなかなか離陸しない。

なんとモスクワに到着するヨーロッパ各地からの乗り継ぎ便を待っているらしい。1時間以上過ぎてから乗客30人くらいが乗ってくる。乗り継ぎ便を待つなんてことは私の経験では初めてだ。

どうにかこうにか飛行機が離陸した。私は9日前の日本発のフライトで途中だった映画の続きを見ていたが、1時間もしないうちにその画面がいきなり暗くなり全く反応しなくなった。回りの席の乗客も同じでざわついている。全ての席の画面が真っ暗だ。

そして10分くらい経ってシステムが初期化された。原因が分からず乗務員がシステムを初期化つまり再起動させたのだろう。いわゆる電源の入り切りは電気製品が故障した時の基本的な対応方法だ。しかしながら効果なくそのまま何も変わらなかった。何度か再起動が試されるが全くダメ、かなり重症だ。乗務員もあきらめたらしく乗客がクレームをつけるも私たちのせいではないのよと言わんばかりで開き直っている。

従って、それから映画や音楽のないまま9時間余りのフライトを過ごすことになる。

機内は暗く、何もやることが無くなった私はボンヤリと外を見る。窓の外を見たら、思わず窓枠にしがみつきたくなるような光景が窓の外に広がっている。

そこにあったのは一面の星空だ。知っている星座の数々、銀河かアンドロメダか分からないが星雲もくっきりと見ることができる。雲の上を飛んでいるので遮るものが全くない。船の上や山の上よりも飛行機は星空観賞の最高の場所だ。生まれて初めてという表現しかできないがこんなに綺麗な星空を見たこともない。信じられない光景が窓の向こうに広がっている。

5分間で1つくらいの割合だろうか、定期的に流れ星も見える。

アエロフロートの粋な演出と思えばこれもまた楽しい。酒を飲み映画を見るという行為は言うなれば時間潰しだ。しかしこの星空観賞は時間潰しではなく、むしろ時間を楽しんでいる。最高の星空を観賞するという貴重な体験をさせてもらった。

なかなかやるね、アエロフロートだ。

## ■行程

2018年12月6日～15日までの10日間、阪急交通社の添乗員付きのパッケージツアーでツアー参加者は総勢26名、モスクワ経由で旧ユーゴスラビア域内に入りチャータバスでの長距離移動の行程になる。行程を以下にまとめた。食事は昼食の※印の2回以外は全てツアーについている。

- ・1日目 13:10 成田発 アエロフロート便 モスクワでベオグラード行きに乗り換え  
ベオグラード着 21:55 (時差-8時間) バスでホテルへ移動  
ベオグラードのホテル BEST WESTERN M 泊 夕食なし (機内食が遅い時間なので)

- ・ 2 日目 ベオグラード市内観光 昼食は市内レストラン  
サラエボへ 305km 移動 セルビア→クロアチア→ボスニアヘルツェゴビナ 国境越え 2 回  
サラエボのホテル HOLLYWOOD 泊 夕食はホテルレストラン
- ・ 3 日目 サラエボ市内観光 昼食は市内レストラン  
モスタルへ 120km 移動 モスタル観光 ドブロブニクへ 140km 移動  
ボスニアヘルツェゴビナ→クロアチア→ボスニアヘルツェゴビナ→クロアチア 国境越え 3 回  
ドブロブニクのホテル COMPAS 泊 夕食は市内レストラン
- ・ 4 日目 ドブロブニク観光  
10 時から自由行動（※昼食は海鮮盛り合わせ） 13 時からコトルへ移動 往復 200km 移動  
クロアチア→ボスニアヘルツェゴビナ→クロアチア 国境越え 2 回  
ドブロブニクのホテル COMPAS 連泊 夕食はホテルレストラン
- ・ 5 日目 スプリットへ 220km 移動  
クロアチア→ボスニアヘルツェゴビナ→クロアチア 国境越え 2 回  
スプリット観光（※昼食はピザとカルボナーラ） トロギールへ 30km 移動しトロギール観光  
トロギールのホテル SVETI KRIT 泊 夕食はホテルレストラン
- ・ 6 日目 シベニクへ 60km 移動  
シベニク観光 ザダルへ 75km 移動 途中プリモシュテンとクルカ国立公園を眺める  
レストランで昼食後にザダル観光 プリトヴィッツエへ 190km 移動  
プリトヴィッツエのホテル MACOLA 泊
- ・ 7 日目 プリトヴィッツエ国立公園観光  
昼食後ザグレブへ 150km 移動 ザグレブ観光クリスマスマーケット 夕食は市内レストラン  
ザグレブのホテル PEONIX 泊
- ・ 8 日目 ブレッドへ 200km 移動 クロアチア→スロベニア国境越え 1 回  
ブレッド観光 ポストイナへ 105km 移動 レストランで昼食後ポストイナ鍾乳洞観光  
ザグレブへ 200km 移動 スロベニア→クロアチア国境越え 1 回  
ザグレブのホテル PEONIX 連泊 夕食は市内レストラン
- ・ 9 日目 ザグレブ空港へ 18km 移動  
11:00 ザグレブ発 アエロフロート便 モスクワで成田行きに乗り換え
- ・ 10 日目 12:40 成田着（定刻より 1 時間遅れ）

## ■費用

総費用は夫婦 2 人で約 54 万円、以下詳細を記す。（全て 2 人分）

- ・ 阪急交通社払い込み（サーチャージ 38830 円×2 含む） 482480 円
- ・ 宿泊税（現地支払い） 21.6 ユーロ 約 2800 円
- ・ 現地での支払い（昼食 2 回、飲み物、入場料など） 約 30000 円
- ・ 土産物 約 15000 円
- ・ 国内交通費（横浜ー成田往復バス回数券） 11000 円
- ・ 海外旅行保険（クレジットカード付帯のため費用発生無し） 0 円